[講演要旨]

地震後に象潟を訪れた人々と象潟地震

安田容子*(東北大学災害科学国際研究所)・今井健太郎(海洋研究開発機構)

§1. はじめに

象潟地震は, 文化元年六月四日(1804年7月10日)に発生した直下型の地震である. 名所であった象潟は隆起し, 地震を機に, 舟を浮かべて遊んだ潟は, 開拓も進み水田の景観へと変わっていった.

象潟地震による被害は, 象潟のある汐越や金浦近辺では, 地震による隆起や液状化による家屋の倒壊等による被害が大きかった.

本発表では, 地震以後に象潟を訪れた人々による象潟の記録から, 象潟に対するまなざしおよび象潟地震に対する意識を読み解く. 対象として, 2 点の旅行記録をとりあげる. 1点は, 地震発生から 3 年後の文化四年(1807)の記録である. まだ象潟の開墾も進んでおらず, 地震直後に訪れた記録としてみることが出来る資料である. もう1点はさらに時間のたった弘化三年(1846)の旅行記録である. 当資料からは, すでに水田地帯となった象潟についての旅行者の視点を見ることが出来る.

§2.『奥羽行』にみる象潟地震

『奥羽行』は, 長岡藩士・植田勝応と永沢茂好が東北地方の沿岸を中心に巡回した旅の記録である.

文化四年に新潟から日本海沿岸から東北地方をまわり, 同年八月には新潟へ戻っている. 象潟へは, 象潟地震発生からちょうど4年後の文化四年六月十五日に訪れている. 女鹿を出発し, 小砂川宿へ至り, 関を通過し, 汐越宿へはいり, 汐越で一泊している.

汐越での記録は, 名所としての象潟についての記述があり, そのなかで文化元年の地震の被害の一部について記録を残している.『奥羽行』における象潟地震の記録によれば, 汐越宿の 500 軒余あった家のうち7・8 軒が漸く残ったのみであり, 家の中にいた者の半分以上は逃げることが出来ず, 梁や棟に打ちひしがれて死亡した. さらに, 大地が裂けて青泥を湧出し, 山は崩れて田の中へ押し出したという.

『奥羽行』の著者は, 象潟の現状をみて, 以下のように名所としての景観が喪失したことを歎く.

> 潟は潰せて漸々草生茂り, 嶋々は多く平地となり, 今は古の象潟の面景はなし, 開闢已来幾数十年, かゝる絶妙の風景を一時地震のために永く失ひしは誠におしむへし, いたむへき次第なり, 今残りし島々も見へ, 小舟の漁に出るもあれとも, 聊風景と見る程の所なし,

また, 蚶満寺より象潟を臨んだ風景を描き、残っている島々の名称を書き残している(図 1).

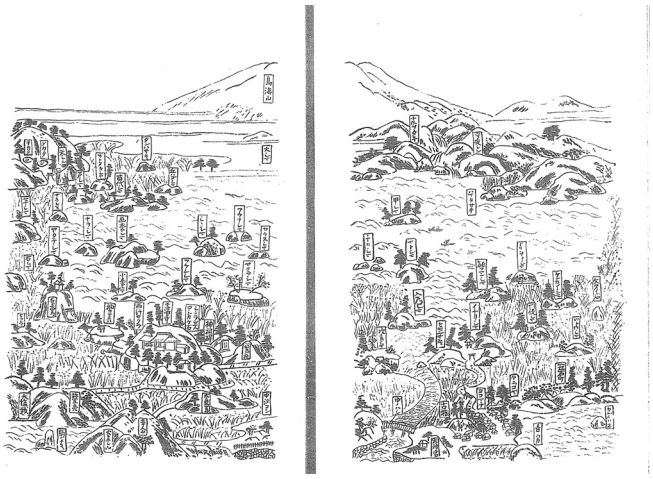

図 1　文化四年 (1807) 蚶満寺より象潟を臨んだスケッチ『奥羽行』(西尾市岩瀬文庫所蔵)

§3. 松森胤保の象潟・金浦紀行

庄内藩支藩である松山藩の付家老であった松森胤保は, 弘化三年四月三日に叔父と共に松山(現山形県酒田市)を出発し, 四月五日まで象潟と金浦を遊覧している. そのときの記録を『遊覧記』巻二に「象潟金浦遊覧」としてのこしている. すでに水田となってしまった潟について,「青田を海原の心にて見, 時ハ猶昔しの事を想像するに」としながら,『奥羽行』の作者たちとほぼ同じ位置に立ってスケッチしている. 松森胤保にとっての象潟は, 名所としての象潟であり, 象潟地震のことについては一言も触れていない. すでに見ることの出来なくなった風景に対して記録をのこしている.

§4. おわりに

象潟地震発生から 4 年後の記録と, 45 年後の記録における, 象潟へのまなざしを検討した. どちらも, 象潟に対して名所との見方を強く持っていることが, 水田となってもなお象潟として蚶満寺から臨む風景をのこしていることからも読み取ることが出来た. 書き残した島々の名称についての検討も必要である.

地震発生から 4 年後の記録では, まだ地震の記憶があり, 地震の情報についても記録していたが, 45 年も経た後では, 名所としての象潟に対する意識は存在していても, 地震の被害については書き残すことにはならなかったといえる.

本研究は JSPS 科研費 16H03146(研究代表者:今井健太郎)の助成を受けて実施しました.